

文献比較

【1】名称 別紙

【2】事件

(1) 饒速日命(邇藝速日命)の降臨

日本書紀	古事記	旧事紀	古語拾遺	その他
<p>塩土の翁(しおつちのおじ)に聞くと『東の方によい土地があり、青い山が取り巻いている。その中へ天の磐舟(いわふね)に乗って、とび降ってきた者がある』と。思うにその土地は、大業をひろめ天下を治めるによいであろう。そのとび降ってきた者は、饒速日(にぎはやひ)というものである。そこに行くと都をつくるにかぎる」と。</p>	<p>さて、ここ(引用者:イワレヒコ)の東征の最終段階)邇藝速日命(ニギハヤヒノミコト)が、伊波礼毘古命のもとに参上して、天つ神の御子に申しあげるには、「天つ神の御子(瓊々杵尊)が天降って来られたと聞きましたので、あとを追って天降って参りました」と申しあげて、やがて天つ神の子であるしるしの宝物を献って、お仕え申しあげた。</p>	<p>天照太神が仰せになった。「豊葦原の千秋長五百秋長(ちあきながいほあきなが)の瑞穂(みずほ)の国は、わが御子の正哉吾勝勝速日天押穗耳尊(まさかあかつかははやひあまのおしほみのみこと)の治めるべき国である」と仰せになり命じられて、天からお降しになった。ときに、高皇産靈尊(たかみむすひのみこと)の子の思兼神(おもいかねのかみ)の妹・万幡豊秋津師姫栲幡千姫命(よろずはたとよあきつしひめたくはたちぢひめのみこと)を妃として、天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊(あまてるくにてるひこあまのほあかりくしたまにぎはやひのみこと)をお生みになった。</p> <p>このとき、正哉吾勝勝速日天押穗耳尊が、天照太神に奏して申しあげた。「私がまさに天降ろうと思ひ、準備をしているあいだに、生まれた子がいます。これを天降すべきです」そこで、天照太神は、これを許された。</p> <p>天神の御祖神は、詔して、天孫の璽(しるし)である瑞宝十種を授けた。(略:瑞宝十種の詳細)</p> <p>高皇産靈尊が仰せになった。「もし、葦原の中国の敵で、神をふせいで待ち受け、戦うものがあるならば、よく方策をたて、計略をもうけ平定せよ」</p> <p>そして、三十二人に命じて、みな防御の人として天降しお仕えさせた。(略:32柱の命の詳細)</p> <p>また、五部(いつとものお)の人が副(かみ)従って天降り、お仕えした。(略:五部の人の詳細)</p> <p>五部の造が供領(とものみやつこ)となり、天物部(あまのものべ)を率いて天降りお仕えした。(略:五部の造の詳細)</p> <p>天物部ら二十五部の人が、同じく兵杖を帯びて天降り、お仕えした。(略:二十五部の人の詳細)</p> <p>船長が同じく、梶をとる人たちを率いて、天降りお仕えした。(略:船長1人・梶取1人・船子4人、計6人の詳細)</p> <p>饒速日尊(にぎはやひのみこと)は、天神の御祖神のご命令で、天の磐船にのり、河内国の河上の嵯峯(いかるがひね)に天降られた。さらに、大倭国の鳥見の白庭山にお遷りになった。天の磐船に乗り、大虚空(おおぞら)をかけめぐり、この地をめぐり見て天降られた。すなわち、「虚空見つ日本(やまと)の国」といわれるのは、このことである。</p>	記載なし	
<p>イワレヒコの侵攻以前に降臨</p>	<p>瓊々杵尊(古事記では饒速日尊の弟ではない)の降臨ののちに降臨</p>	<p>旧事紀では、饒速日尊の降臨ののち降臨する瓊々杵尊(ににぎのみこと)は饒速日尊の弟であり、イワレヒコの曾祖父である。</p>		

(2) 饒速日命(邇藝速日命)の結婚・最後

日本書紀	古事記	旧事紀	古語拾遺	その他
<p>さて長髓彦は使いを送って、天皇に言上し、「昔、天神の御子が、天磐船に乗って天降られました。櫛玉饒速日命(クシタマニギハヤヒノミコト)といひます。この人が我が妹の三炊屋媛(ミカシキヤヒメ)を娶とって子ができました。名を可美真手命(ウマシマデノミコト)といひます。それで、手前は、饒速日命を君として仕えています。<最後の記述はない></p>	<p>邇藝速日命(ニギハヤヒノミコト)が、伊波礼毘古命のもとに参上して……お仕え申しあげた。そして邇藝速日命は、トミビコの妹の登美夜毘売(トミヤビメ)と結婚して生んだ子が宇摩志麻遲命(ウマシマヂノミコト)……。<最後の記述はない></p>	<p>饒速日尊は長髓彦(ながすねひこ)の妹の御炊屋姫(みかしきやひめ)を娶って妃とした。御炊屋姫は妊娠した。まだ子が生まれないうちに、饒速日尊は亡くなられた。……</p> <p>饒速日尊は長髓彦(ながすねひこ)の妹の御炊屋姫(みかしきやひめ)を娶り妃として、宇摩志麻治命(うましまちのみこと)をお生みになった。</p> <p>これより以前、妊娠してまだ子が生まれていないときに、饒速日尊は妻へ仰せられた。「お前がはらんでいる子が、もし男子であれば味間見命(うましまみのみこと)と名づけなさい。もし女子であれば色麻弥命(しこまみのみこと)と名づけなさい」産まれたのは男子だったので、味間見命と名づけた。……</p> <p>饒速日尊は、妻の御炊屋姫に夢の中で教えて仰せになった。「お前の子は、私のように形見のものとしなさい」そうして、天璽瑞宝を授けた。また、天の羽羽弓・羽羽矢、また神衣・帯・手貫の三つのもを登美の白庭邑に埋葬して、これを墓とした。</p> <p>天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊は、天道日女命(あめみちひめのみこと)を妃として、天上で天香語山命(あまのかごやまのみこと)をお生みになった。天降って、御炊屋姫を妃として、宇摩志麻治命をお生みになった。</p> <p>……兄は、天照国照彦天火明櫛玉饒速日尊。弟は、天鏡石国饒石天津彦火瓊々杵尊(あめにぎしくににぎしあまつひこほのくににぎのみこと)。</p>	記載なし	

(3) 孔舎衛の戦い

日本書紀	古事記	旧事紀	古語拾遺	その他
<p>夏四月九日に、皇軍は兵を整え、歩いて竜田に向った。その道は狭くけわしくて、人が並んで行くことができなかつた。そこで引返して、さらに東の方生駒山を越えて内つ国に入ろうとした。そのときに長髓彦(ながすねひこ)がそれを聞き、「天神の子がやってくるわけは、きっとわが国を奪おうとするのだろう」といって、全軍を率いて孔舎衛坂(くさへのさか)で戦った。流れ矢が当たって五瀬命(ひぎはぎ)に当たった。天皇の軍は進むことができなかつた。天皇はこれを憂えて、はかりごとをめぐらされた。</p> <p>「いま自分は日神(ひのかみ)の子孫であるのに、日に向って敵を討つのは、天道に逆らっている。一度退去して弱そうに見せ、天神地祇をお祀りし、背中に太陽を負い、日神の威光をかりて、敵に襲いかかるのがよいだろう。このようにすれば刃に血ぬらずして、敵はきっと敗れるだろう」といわれた。皆は「そのとおりです」という。そこで軍中に告げていわれた。「いったん停止。ここから進むな」と。そして軍兵を率いて帰られた。敵もあえて後を追わなかつた。草香津(くさかのつ)に引き返し、盾をたてて雉たけびをし士気を鼓舞されたそれでその津を、改めて盾津(たてつ)とよんだ。いま蓼津(たでつ)というのは、なままっているのである。</p> <p>……軍は茅渟(ちぬ)和泉の海)の山城水門(やまきのみなと)についた。</p>	<p>……このとき、登美トミノ古(代)の鳥見郷(とりみのさと)、すなわち現在の奈良市富雄町あたりの古名>の那賀須泥毘古(ナガスネビコ)が軍勢を起こして、待ちうけて戦った。そこで、御餼(みけ)に入れてあった楯を取って船から下り立たれた。それで、その地を楯津(たてつ)といった。今も日下の蓼津とよんでいる。こうして登美毘古(トミビコ)登美的那賀須泥毘古(トミビコ)と戦われたとき、五瀬(命)は、御手に登美毘古の手痛い矢をお受けになった。そこで五瀬命が仰せられるには、「私は日の神の御子として、日に向かって戦うのは良くなかつた。それで、賤しい奴の矢で重傷を負ったのだ。今からは遠回りをして、日を背に負うて敵を撃とう」と誓い、南の方から回ってお進みになった……</p>	<p>夏四月九日、皇軍は兵をととのえ、龍田に向かった。その道は狭くけわしくて、人が並んで行くことはできなかつた。そこで引き返して、さらに東のほうの胆駒山を越えて内つ国に入ろうとした。</p> <p>そのときに、長髓彦(ながすねひこ)がそれを聞いていった。「天神の子たちがやってくるわけは、きっと我が国を奪おうとするのだろう」そうして、全軍を率いて孔舎衛坂(くさへのさか)で戦った。流れ矢が当たって、天孫の兄の五瀬命(いつせのみこと)の肘脛(ひじはぎ)に当たった。</p> <p>皇軍は、進み戦うことが出来なかつた。天孫はこれを憂いて、計りごとをめぐらして仰せになった。「いま、自分は日神の子孫であるのに、日に向かって敵を討つのは天道にさからっている。一度退却して弱そうに見せ、天神地祇をお祀りし、背に太陽を負い、日神の威光をかりて敵に襲いかかるのがよいだろう。そうすれば、刃に血ぬらずして、敵はきっとおのずから敗れるだろう」皆は申しあげた。「そのとおりです」そこで、軍中に告げて仰せられた。「いったん止まり、ここから進むな」そして、軍兵を率いて帰られた。敵もあえて後を追わなかつた。</p> <p>草香の津に引き返し、盾をたてて雉たけびをして士気を鼓舞された。それでその津を、改めて盾津(たてつ)と名づけた。今、蓼津(たでつ)というのは、なままったものである。</p> <p>……軍は茅渟(ちぬ)の山城水門(やまきのみなと)に着いた。</p>	<p>(3)・(4)・(5)については、次のように記すのみ。物部氏が遠祖(とほつおや)饒速日命(にぎはやひのみこと)、虜(あた)を殺し衆(もろひと)を帥(み)て、官軍(みいくさ)に帰順(まつろ)ふ。<長髓彦のことを虜と記している></p>	

(4) 長髓彦とイワレヒコとの最後の決戦

日本書紀	古事記	旧事紀	古語拾遺	その他
<p>十二月四日、皇軍はついに長髓彦を討つことになった。戦いを重ねたが仲々勝つことができなかつた。そのとき急に空が暗くなつてきて、雹(ひょう)が降つてきた。そこへ金色の不思議な雉が飛んできて、天皇の弓の先にとまった。その雉は光り輝いて、そのさまは雷光のようであった。このため長髓彦の軍勢は、皆眩惑されて力戦できなかった。長髓彦というのはもと邑(むら)の名であり、それを人名とした。皇軍が雉の瑞兆を得たことから、時の人は雉の邑(とびのむら)と名づけた。</p>	<p>その後、登美毘古を討とうとされたとき、歌われた歌は、(歌1略)</p> <p>またお歌いになった歌は、(歌2略)</p>	<p>十二月四日、皇軍はついに長髓彦(ながすねひこ)を討つことになった。戦いを重ねたが、なかなか勝つことができなかつた。そのとき、急に空が暗くなつてきて、雹(ひょう)が降つてきた。そこへ金色の不思議な雉(とび)が飛んできて、天孫の弓の先にとまった。その雉は光り輝いて、そのさまは雷光のようだった。このため、長髓彦の軍勢は、みな眩惑されて力戦できなかった。長髓彦の長髓彦というのは、もと邑の名であり、それをとって人名とした。皇軍が雉の瑞兆を得たことから、時の人はここを雉の邑と名づけた。今、鳥見(とみ)というのはなままったものである。</p>	<p>(3)の欄に同じ。</p>	

<p>今、鳥見（とみ）というのはなまったものである。昔、孔舎衛の戦いに、五瀬命が矢に当って歿けられた。天皇はこれを忘れず、常に恨みに思つておられた。この戦いにおいて仇をとりたいたと思われた。そして歌つていわれた。</p> <p>（歌1 略） また歌つていう。</p> <p>（歌2 略） また兵を放つて急迫した。すべて諸々の御歌を、みな来目歌という。これは歌つた人を指して名づけたのである。</p> <p>さて長髓彦は使いを送つて、天皇に言上し、「昔、天神の御子が、天磐船に乗つて天降られました。櫛玉饒速日命（クシタマニギハヤヒノミコト）といいます。この人が我が妹の三炊屋媛（ミカシキヤヒメ）を娶つて子ができました。名を可美真手命（ウマシマデノミコト）といいます。それで、手前は、饒速日命を君として仕えています。一体天神の子は二人おられるのですか。どうしてまた天神の子と名乗つて、人の土地を奪おうとするのですか。手前が思うのにそれは偽者でしょう」と。天皇がいわれる。「天神の子は多くいる。お前が君とする人が、本当に天神の子ならば、必ず表（しるし／しるしの物）があるだろう。それを示しなさい」と。長髓彦は、饒速日命の天の羽羽矢（あまのははや／蛇の呪力を負つた矢）と歩鞞（かちゆき／徒歩で弓を射る時に使うヤナグイ／矢を入れて携行する道具）を天皇に示した。天皇はご覧になって、「いつわりではない」といわれ、帰つて所持の天の羽羽矢一本と、歩鞞を長髓彦に示された。長髓彦はその天神の表を見て、ますます恐れ、畏まった。けれども兵器の用意はすっかり構えられ、中途で止めることは難しい。そして間違つた考えを捨てず、改心の気持がない。饒速日命は、もとより天神が深く心配されるのは、天孫のことだけであることを知っていた。またかの長髓彦は、性質がねじけたところがあり、天神と人とは全く異なるのだということを教えても、分りそうもないことを見てこれを殺害された。そしてその部下達を率いて帰順された。</p>	<p>またお歌いになった歌は、(歌3 略)</p> <p><戦う場面なく、歌が3つ記されているのみ></p>	<p>昔、孔舎衛(くさえ)の戦いで、五瀬命(いつせのみこと)が矢に当たつて亡くなられた。天孫はそれ以来、常に憤りを抱いておられた。この戦いにおいて、仇をとりたいたと思われた。そして、歌つて仰せられた。</p> <p>(歌1 略)</p> <p>また歌つて仰せられた。</p> <p>(歌2 略)</p> <p>また兵を放つて急迫した。すべて諸々の御歌を、みな来目歌という。これは、来目部が歌い伝えてきたからである。</p> <p>ときに、長髓彦は使いを送つて、天孫に申しあげた。「昔、天神の御子がおられて、天の磐船(いわふね)に乗つて天降られました。名を櫛玉饒速日尊(くしたまにぎはやひのみこと)と申しあげます。このかたが、わが妹の三炊屋姫(みかしきやひめ)を娶つて御子をお生みになりました。御子の名を宇摩志麻治命(うましまちのみこと)と申しあげます。そのため、私は饒速日尊、次いで宇摩志麻治命を君として仕えてきました。いったい、天神の御子は二人もおられるのですか。どうしてまた、天神の子と名のつて、人の土地を奪おうとするのですか。饒速日尊以外に天神の御子がいるなど、聞いたことはありません。私が思うに、あなたは偽者でしょう」天孫は仰せになった。「天神の子は多くいる。お前が君とするものが、本当に天神の子ならば、必ずしるしの物があるだろう。それを示しなさい」長髓彦は、饒速日尊の天の羽羽矢(ははや)一本と、歩鞞(かちゆき)を天孫に示した。天孫はご覧になって、「いつわりではない」と仰られて、帰つて所持の天の羽羽矢一本と、歩鞞を長髓彦に示された。</p> <p>長髓彦は、その天つしるしを見て、ますます恐れを感じた。けれども、兵器の用意はすっかり構えられ、その勢いは途中で止めることはできなかった。そしてなおも、間違つた考えを捨てず、改心の気持もなかった。宇摩志麻治命は、もとより天神が深く恵みを垂れるのは、天孫に対してだけであることを知っていた。また、かの長髓彦は、性質がねじけたところがあり、天神と人とは全く異なるのだということを教えても、分りそうもないことを見て、伯父である長髓彦を殺害した。そして、その部下たちを率いて帰順された。</p>	
--	--	--	--

(5) 長髓彦の最後

日本書紀	古事記	旧事紀	古語拾遺	その他
饒速日命は……長髓彦……を殺害された。	記載なし	宇摩志麻治命は……、伯父である長髓彦を殺害した。	(3)の欄に同じ。	東日流外三郡誌：イワレヒコノミコトとの戦い後、長髓彦ナガスネヒコは兄アビヒコと共に日高見(東北地方)の地を新たな故国として移住し、先住民族と合流して「アラバキ族」と名乗り、日高見の国を長く治めたと記述している 下伊駒安陪姓之家譜(下国家譜)：安日長髓は……東征してきた神武天皇に敗れ、死罪を赦されて都退流卒都破魔(つかるそつとはま)に流された。その安東浦に蟄居し、代々安東太を名のつた。 曾我物語・真名本：神武天王が世に出て、安日と代を争う時、……天王は戦いに勝ち、安日一族を下東国外浜へ追いやつた。

(6) 以上のまとめ

日本書紀	古事記	旧事紀	古語拾遺	その他
饒速日命が降臨→三炊屋媛と結婚→可美真手命誕生→イワレヒコの侵攻→饒速日命は長髓彦殺害<饒速日命の最後は不明>	邇藝速日命が降臨→イワレヒコの侵攻終了→登美夜毘売と結婚→宇麻志麻遲命誕生<長髓彦・邇藝速日命の最後は不明>	饒速日尊が降臨→御炊屋姫と結婚→饒速日尊は逝去→宇摩志麻治命誕生→イワレヒコの侵攻→宇摩志麻治命が長髓彦殺害	イワレヒコの侵攻→饒速日命が長髓彦殺害	諸文献によれば、イワレヒコの侵攻終了→長髓彦は東北へ

【3】系図 別紙